

研究雑話 (24)

フランスの障害者教育・福祉事情 (八) … 学級編成の原理、基礎集団としての小舎制

藤井力夫

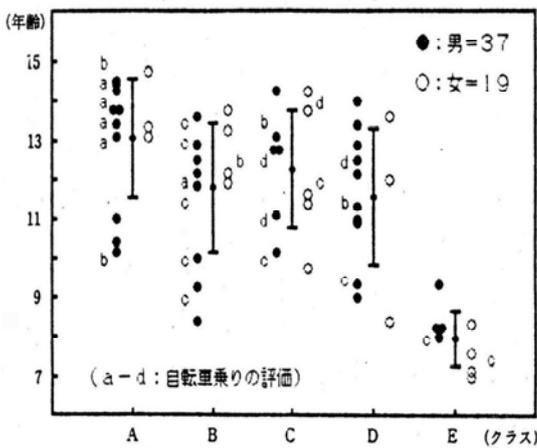
フランスでは知的障害を対象とするほとんどの養護学校が親の会等の自治団体により設立された私立の学校です。なぜ可能なのか、前回は、財政・運営面での仕組みについてお話ししました。日本的に言えば文部省と厚生省が人件費の面で具体的に分担しあい、日々の措置費は医療保険を積極的に利用した形で賄う学校。精神病院で最重度の場合には院内学級としての組織ですが、寄宿舎をもつ知的障害児の養護学校の場合は前回紹介した教職員組織が一つの典型です。文部省所管の先生と厚生省所管の先生が同じ学級の先生としてペアを組む(小中部)。町の大工さんなど技術免許をもった職人を厚生省所管の先生として積極的に採用(高等部)。児童精神科医、言語療法士、心理運動士等医療スタッフが充実。寄宿費及び日常経費は医療保険から賄う。なんと合理的で有機的な組織でしょう。「子どもにも合わせて、教育と医療、福祉これらを組み替え束ねた学校」。そう言っていると思います。

では、これを実現させた原理、教育組織の編成原理は何なのでしょう。セガン以降の歴史のなかでこれまで何回かお話ししてきた「小舎制の原理」。この原理の現代的適用に創造的な組織の実現の根拠があります。必ずしも自覚されているとは言えませんが、ノーマライゼーション、統合教育の推進といった課題に対しても、この原理を捨てては

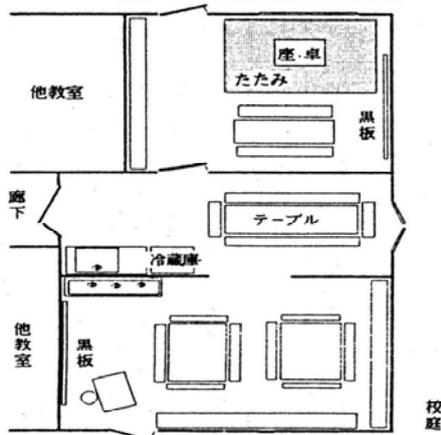
実現出来ないとする彼らの意志を読みとることが出来ます。

まず図Aを見ていただきたい。調査した養護学校の学級編成の実際。小中部五六名で五学級。各クラスの平均年齢と分散を図示。男女別にプロット。クラスEの七、八歳児の年少は別として、年齢に関係なく十二名程度でクラス編成。表中、a-dの記号を付記したが、自転車乗りの程度を評価。クラスAの男の先生がツール・ド・フランスにも出場するような先生で、手足の共同運動その他、自転車乗りを大いに利用したいと企図。それでクラスAは自転車に興味のあることも多し。近く所属。空き缶を一定間隔に置いたジグザグ走行。近くのバンク(競輪場)に出かけ競輪走行での身体傾斜。あるいは近くの村の小学校までの遠乗り学習。さまざま日常生活面で自転車を取り入れた授業を展開しています。

この先生は厚生省所管の先生。このクラスにはもう一人、文部省所管の女の先生がいます。読み聞かせをしたり、調理、裁縫、綾取りなども教えます。実にお母さんといった感



図A. クラス編成の実際 (I.M.P.de BEAUVAIS, 1985-86)



図B. 教室、クラスAの図面

じで、ソファや座卓、テーブルに座りながらいる教えるといった感じでした。したがって空間が大事になります。図BはクラスAの教室の図面少し広めの二LDK。三畳の畳まで配置。最初からあったのではなく、柔道に使う畳を体育館の物置から持ってきて利用しているのです。同一時間、二人の先生と十二人の子どもたちが、それぞれ二手に分かれて勉強します。まさに家庭の雰囲気です。真ん中に台所兼居間があります。おやつを食べる時や休憩の時みんながあつまります。食堂は別にあります。お城のような館を使った学校もありますし、新しく建てたまさに学校のような建物もあります。この学校は後者に属する建物ですが、中身は図のように工夫されています。兄ちゃん、姉ちゃんもいて、弟や妹もいる。そんな学級としてクラスが存在し、いろいろ試みしつかり自分のものとする。そんな学校が模索されているのです。(北海道教育大学教授)